カウンセリングにおけるスーパーヴィジョン

教育相談室

沢田慶輔　東大教育学部教授

佐治守夫　東大教育学部講師
国立精神衛生研究所

村瀬孝雄　国立国府台病院神経科

野村東助　神奈川県立せりがや園

筒井健雄　東大大学院博士課程3年
教育心理学専攻

§1.　スーパーヴィジョンとはなにか（村瀬）
§2.　スーパーヴィジョンの具体例の検討
2.1. スーパーヴァイザーのオリエンテーション（野村）
2. 2. 記録，内観，コメント
2. 3. スーパーヴァイジーの立場（筒井）
2. 4. スーパーヴァイザーの考察（野村）
2. 5. スーパーヴァイザー・スーパーヴァイジー関係についてのコメント（佐治）

1.　スーパーヴィジョンとはなにか

近年わが国においてもカウンセラーあるいは心理治療者の養成にとってスーパーヴィジョンと呼ばれるものが重要な意味をもつことが次第に認められつつあり，実際にも種々の形で実践されている。しかしながら一歩立止って我々がスーパーヴィジョンをどのように考えているのか，スーパーヴィジョンの目的は何であるか，現実のスーパーヴィジョンで何が起っているか，スーパーヴィジョンの限界はどこにあるか？，等々の疑問をもった場合，満足のいく答は殆どみつからないというのが現状であると思う。識者の中にはただカウンセリングについてある程度長い経験をもった人が初歩の人にカウンセリング実技の指導を行うことがスーパーヴィジョンであると考えている人もあるかも知れない。あるいはスーパーヴィジョンは知的指導，教育であって，治療行為のような感情的，あるいは実存的な要因とは関係がないと考えている人もあるかも知れない。

本章においては，治療者養成をめぐってCarl Rogersの考えと精神分析学派の二，三の人々の考え方とを紹介し，かつスーパーヴィジョンに関してどのようなことが問題として論じられているかを知る手がかりとして，Harold Searles という人によるスーパーヴァイザーの感情体験の価値についての考察を実例と共に示してみよう。なお参考までに興味ありそうな文献をいくつか末尾にのせておこう。

Carl Rogersは次のようにいっている。「スーパーヴィジョンの一般的目標は，現在時点において学生の中に在る自信と技倆とを尊重して彼が自らの態度を明確にしたり，他の種々の考え方，やり方を理解したり，できるように彼を援助することである。その際重要なことはこれらの援助があくまでも学生の自由と主体性を損わないように行われなければならないという点である。」（Rogers，1951，P471）この最後の点の重視は，スーパーヴィジョンという言葉が与えがちな何か「強制的」もしくは，「是非の判断的な」ニュアンスを否定するものであり，Rogersは同じ書物の中でスーパーヴァイザー以外の何か別の名前の方が，彼の考えている指導者の機能にふさわしいかも知れないと述べている。その場合彼が考えているのは，「学生に関心をもち相談を求められた場合にだけ，資源として役立ちうる人であり，学生自身が感じている問題点を彼自らがより明確化できるように援助する人である。」（P475），これを別の面から考えると，Rogers が強調しているのは「決して一つ一つの技術

とか知識ではなく，学生が種々の治療状況の中で安心して治療的に動けること，常に安心して新しい真実を追い求めていけること，彼自身の成長発見のための基盤を自らの中にもつことなのである。」（P477）ただし誤解のないようにつけ加えておきたいのは，このような指導者の態度は決して治療者のそれと全く同じではないということである。治療関係の中でのいわゆる受容関係がそのままの形でスーパーヴィジョンにもちこまれるのではなく，学生の安定感に応じて，必要かつ有意義と認められる場合には，批評や分析も行われるのである。（P471）このようにRogersの治療者訓練についての考え方には，人格や人間の成長に関する彼の考え方がそのまゝ反映していることは当然のことである。次に述べる精神分析学派の訓練においては同じ意味で，この学派の人間観，人間のかかわり合いについての考え方が反映されていても不思議ではないわけである。

精神分析学者の土居がその著書（1961）の中で「学習について」（第11章）述べていることから，二，三の点を取出してみたい。「治療者の患者についての理解力は治療者が自分自身について持つ洞察にもとづいており，この自己自身について洞察が不十分で重要な盲点がある場合，指導者がこれを指摘しないと治療者自身では容易にそれに気づかないものである。しかもこの盲点はしばしば治療者の監督者に対する態度，関係の中に認めることができる。いいかえれば，治療者自身の意識していない自分の感情的態度は，患者との関係に重要な役割を果しているのみならず，監督者との関係の中にも登場してくるのである。例えばある治療者はその監督者との関係において傷つき易く，そのことで強い反発心を起す可能性が強いことについて十分な洞察がなく，後日自己と同じ種類の問題をもつ患者に対して十分な理解をもてなかったのである。この治療者が監督者との関係においてこの自分の盲点に気付いたとき，患者との関係は好転した。」この例からも分るように，精神分析学のスーパーヴィジョンにおいては，治療の場合と同様に，転移，対抗転移，抵抗，洞察といった現象が非常に重視されている。

（以上は土居の記述の要約であり原文ではないことをお断りしておく）

ところで精神分析学ではよく知られているように，治療者の養成，訓練に殆ど不可欠の条件として教育分析の意義を重視する。ある意味では，この学派におけるスーパーヴィジョンの問題は教育分析の中に集約されているということもできよう。そして我々が教育分析についての土居の叙述を読んでいくと，治療者の学習について，Rogers と土居との間にある考えの違いがここでもずい分大きいことに気付くのである。土居が自己の受けた教育分析の体験について述べているところを読んで，筆者がもっとも印象的だったのは，彼にとってはじめ教育分析者は権威と力をもった洗脳者ともいうべき人間であり，分析をうけた彼は，分析関係の中で洗脳の恐怖と斗い，一時は傷ついた獣のごとき心境に陥いりつつも，（上点部分は原文のまま）自分の恐怖を分析し，最後には新しい自己を回復させて，分析者の自由な共働者として誕生したという点であった。これは必ずしも土居個人の体験としてのみ考えられるべきではなく，もっと一般的な真実を含んでいるように思われる。私はそこに何か精神分析学とRogersとの間にある人間の変化，成長に対する考え方，態度の微妙ではあるが，かなり根本的な相異を感ずるのである。この相異を一言で表現するのはむつかしいが，抽象的にいえば治療者のもつ権威についてのFreudとRogersとの在り方の違いともいうべきものがここに反映されているのかも知れない。

さて我々の相談室におけるスーパーヴィジョンについては次章で具体的に考察されるはずであるので，以下においては精神分析学的スーパーヴィジョンの実例を二，三あげてみたい。

Ekstein R. &. Wallerstein R. は精神分析学の学習に当って起って来る学習者個々人の問題はまことに千差万別であるが，そこに何か学習型のようなものを区別することもできると述べ，その一つの型として「懸命な否定を通しての学習」をあげている。これは学習者にとってスーパーヴィジョンをうけるという体験があまりにも衝撃的なので，これを，別に目新しいことではないのだ，今さら事新しく注目するには及ばないとして否定したくなる，拭い去りたくなる，気持のことをさしている。「実例」Dr.Zは本質的にアカデミックな心理学の訓練をうけてきた心理学者であり，種々の心理治療学派の評価と比較に興味があり，どちらかというと「客観的科学者」の役割をとりたがっていた。彼は自らが患者との間に心理的距離を保っていることは，真の「客観性」のためにどうしても必要なのだと頑強に主張して譲らなかった。スーパーヴィジョンが役に立つのは，治療における相互のやりとりについてスーパーヴァイザーが示唆する見方，考え方を取り入れ，自ら試みることなのだが，Dr. Zにはこのような態度をとることを自らに許さず，終始こうした考え方を否定しなければならなかった。実際の治療においてはどうであったかというと彼は自らが保とうとしていた「客観性」にわざわいされて，患者の情動的な生活の中に有意味に，援助的に介入することが難しかった。しかしながらスーパーヴィジョンを通して

明かになってきたことは彼が，否定的態度をとりつつも少しずつ変化してきたということであり，しかも彼自身がこの変化の本質について，スーパーヴァイザーよりもよく気付いていたということである。彼は自分の互人関係の値を変える必要があること，すなわちもっとそこに「とびこむこと，入りこむこと」が必要であることを，そうすることへの抵抗と，その必要性の否定を示しつゝも，気付いていたのである。

次にSearlesという人がスーパーヴァイザーの側の感情体験を分析している例をあげよう。

この人の考え方の重点は，丁度治療者――患者との関係において患者の側の転移感情だけでなく，治療者の側の反対方向転移も重視されているように，スーパーヴァイザーのスーパーヴァイジーに対する感情的態度を知ることが重要だという点にある。それはスーパーヴァイザーになかなか気付かれないものでありながら，両者の関係，ひいてはスーパーヴァイジーと患者との関係にも大きく反映する可能性があるのである。従来，スーパーヴァイザーはセラピストと違って情緒的に動かされない，中立的，知的なアドヴァイザー，判断者という風に見られてきたが，実は，治療者と患者との関係は，スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーとの関係に反映され，治療者が患者に対してもつ感情がスーパーヴァイザーに向けられるとき，スーパーヴァイザーの方も様々の感情反応を示すのである。

紙数と時間の関係上，この論文から我々にとって参考になりそうな実例を一つだけ引用するに止める。 Fromm Reichmanなども参加して行われた分裂病者との治療についてのグループスーパーヴィジョン，セミナーである治療者が長いこと苦労し，とりわけ手こずっていた自分の治療例を提示した。彼と患者との関係がうまくいってないことの一つの徴候は彼がこの患者との治療に限って自分が屢々眠気を催すことに気付いている点にあった。セミナーの集まりでこのことを問題にしていく中に実に興味ある変化がメンバー全員間の関係，――その中には治療者自身も入っていた――に生じた。当初のころは，何となく生気のない，半分眠ったようなテナーの声が支配的であったのが，4週間経った頃には，はるかに生々とした関心にみちた声の調子に変っていたのである。治療者はもはや自分は患者と会っていて眠くないといい，さらに，この変化の原因は少くとも部分的には，この点に関しての自分の罪をグループの前で告白したことにあると信じている旨，表明したのであった。彼はまたこれと同時に，彼が患者と共にいるときに患者の言動に対して自分の中に起ってくる連想的過程として前よりもずっと自由に働かしめ，それを表明する勇気がでてきたことが分ったとも述べた。このあとの変化がグループ・メンバーの参加に基くところ大であることは皆によって確認された。

このようにしてグループは初め治療関係を阻止していた困難を体験し，これを今―ここ(here-and-now) の次元で解決することができたのである。彼らがこの困難をたどっていくことによって，患者自身がもっている高度の不安とアンビヴァレント (Ambivalent) な感情が治療者の中にも不安をひき起し，眠くなるという防衛をとらせていたことが判明した。治療者はこの自らの不安をグループに伝えていて，その結果一時的にではあったが，グループ全体も不安に対して同様の無意識的防衛を行なっていたものと考えられる。

以上の実例から我々は何を学びとれるだろうか？筆者は卒直にいってこれに対するpositiveな答えを持っていない。ただ二，三気付いた点を記してみよう。その一つはスーパーヴァイザーはスーパーヴァイジーとの関係を治療関係と同様に，非常に私的な全人間的な真剣な関係としてうけとるべきであるということである。治療者の個人的感情，スーパーヴァイザーに対する態度などが真剣に問題にされて始めて，効果的なスーパーヴィジョンが行なわれるとさえいえるかも知れない。

もう一つは，我々のグループスーパーヴィジョンにおいても，前記の実例の如く，メンバー全員が治療者の感情を生き生きと切実に分かち合えるような雰囲気の充実がほしいということである。もちろん我々のグループは，その真剣さと水準において決して低い評価に価いするとは思えない。しかしケースの提示の仕方，我々個々人のケースの取り組み方などの点で，まだまだ反省，進歩すべき余地が十分にあるように思える。慣れ合いでなく，もっと密度の高い形でケースを提示し，それに対してもっと豊かな様々な見方があらわれてくることを期待したい。

＜文　　献＞

1. Carl Rogers. Client-centered Therapy 1951. Houghton miffilin.
2. Rudolf Ekstein & Robert Wallerstein. The teaching and learning of Psychotherapy 1958 Basic Books Inc. New York.
（この書の巻末にあるGuide to the Literatureの中にも興味ある文献が多く挙っている）
3. Harold Searles. The Informational value of the supervisor's emotional experience. Psychiatry 1958, 18. 135～146.

4. 土居健郎　精神分析　1961　金子書房
5. Lewis. R. Wolberg. The Technique of psychotherapy 641～660　1954 Grune & Stratton・
6. Fromm-Reichman, Frieda. Notes on the Personal and Professional Requirements of a Psychotherapist. Psychiatry. 12. 1949　361～378.

§2.　スーパーヴィジョンの具体例の検討

我々東京大学教育学部教育相談室では，ケースカンファレンスと，テープカンファレンスの形で毎週2回，グループスーパーヴィジョンの機会を持っている。またこれと平行して，それぞれが任意に個人的なスーパーヴィジョンをも行っている。スーパーヴィジョンのこの二つの形式は，その優劣が問題にされるべきものではない。むしろ両者の機能が相補って，はじめて充分な効果をもたらすものであろう。そして，このグループによるスーパーヴィジョンの雰囲気こそが，我々相談室の在り方を最も生き生きとあらわしていると考えている。

相談室も創立（32年暮）以来7年を経て，メンバーの交代期を迎えようやく養成の問題に取り組めるまでになって来た。むしろ正面から取り組まざるを得なくなって来たのかもしれない。

本章では個人的なスーパーヴィジョン関係において，現実に生じているものについて検討し，それを通して，我々の治療関係，スーパーヴィジョン関係についての見方，オリエンテーションを明らかにしてみたい。

グループスーパーヴィジョンについての報告と検討は，次の機会にゆずることにする。

2. 1. スーパーヴァイザーのオリエンテーション

私の治療観からすれば，治療の目的の全てに先立つ基本的条件は，患者との出合において，治療者が真に人間的な意味で，成熟し，安定した深い関係を樹立し得ることにある。

いいかえれば，人間が共にある時に，お互が，自分自身であり得ること，あるいは自分自身であり得ることに向って，お互いが役立つような関係といいたい。「自分自身である」ということは，絶対的に，本来なる自己といったスタティックな概念ではなく，いわば「よりありのまま」への流動的，相対的な過程を指し示している。これに治療という特定の対人関係に限って考えられるものではなく，相互に生かし合う限りでのすべての人間関係の基盤であると私は思う。

治療の具体性のなかで，もう少しいうならば治療者の個々の働きかけが，形においてどういうものであれ，それが深い関心と共感的経験から，純粋に，統合された形で，すっきりと出てくる程度に応じて，患者がみずからの可能性をより発展させるに役立つ関係が培かわれると私は考えている。

したがって，治療に関する私の最も大きな関心は，治療者の行動の水準で，どう動いたか，あるいはどうすればよいかということではない。たしかに治療者の行動の表面的形態は，患者が直面する刺激の最も顕著な特徴を荷う，にも拘らず患者の治療体験を左右する，より意味のある手がかり（Significant cue）は，治療者が患者自身にかかわる人間としての全体的なリアリティ（total reality）であり，その文脈において意味づけられる治療者の行動のより潜在的（implicit）な意味のもつ性質である。

このように考える私は，自分についても，また他人についても，治療者の成長という時に，個々の場面での理想的な振舞いの型を求めようとはしない。現実の場面を検討すれば，「こうした方がよかった」と充分な根拠を伴なって考えられることがたしかによくある。しかし，それはその時の治療者の全体験を含めた全体的なリアリティにおいて，統合と内的必然性をふまえてあらわれ出づるものでなければ，意味ないと思われる。

むしろ，何故にそのようにできなかったか，そして，そのように志向し得る人間的態勢をどのようにして培かっていけるか。という形で問題にする時，私は初めて治療者の成長を考える実感が得られるのである。

この意味で私は，治療者の成長とは治療者自身の人間的成長が常にその基礎であり，スーパーヴィジョンの目的も，その辺に主眼を置きたいと考えている。しからば，スーパーヴィジョンという特定の事態において，治療者の人間的成長はどのような形で援助され得るだろうか。

治療場面での治療者の体験を契機として，治療者の内面を，より確かに，透明に，豊かにしていく協力関係においてそれが可能であると私は考える。

何故ならば，この関係が実現される時には治療者は自己の人間的全体的にリアリティをよりたしかに深く経験し，掌握し，より統合された形で治療関係を生きていく反応が得られるからであり，それはその人間的存在者としての本来性をより充全に開発すること，すなわち，おのずから他者を生かし得るような関係への志向をよりたしかにすることでもあるからである。

このような思考の底には私の人間観がある。たとえば，のぞましい親子の関係は，人間の本来性が自然に開

発されることにおいて初めて生れるだろう。それと同様で共に生かし合う人間の関係も，それが創られる最終の根拠は，そこに参与する人々の「人間であること」以外にはない。重要なことはある理念を与えること，欠けているものを満たすのではなく，解き展くこと，すでにある可能性を触発することである。

以上のような目的から，私はスーパーヴィジョンの具体的目標を次のようにいい表わせる。

① セラピストは，スーパーヴァイザーと，ともにあることで，その治療の体験や感想をより自由で深く経験することができる。

② どうすればよいかという技術的問題を抜きにするわけではないが，それはむしろ①のプロセスへの具体的手がかりとして活用しようとする，

という2点にしぼられる。スーパーヴァイザーがこのようなオリエンテーションに立つことから，形としては結局，普通の治療関係での在り方と似たものになる。

以下においてひとつの具体例を示しながら，このようなオリエンテーションのもとで，現実にはどのようなプロセスが生じたかを検討し，スーパーヴィジョンの在り方を考えてみたい。

2. 2. 記録・内観コメント

はじめにこのスーパーヴィジョンでとりあげられているケースとプレイ場面を簡単にまとめてみよう。

○K. M. ケースの背景

このケースは，4才の男児で幼稚園で母親から離れようとしないし，さらには登園拒否まで発展したケースとして相談に来た。当初学外から参加していた他の担当者(女性)が毎週1回の割で5ヶ月間プレイセラピィしたあと，昭和38年9月19日より私が本児を引継ぐことになった。それはこの相談室の事情のために，母子ともに担当者が交代することになったので，私がこどもの方を引継いだわけである。引継いだ当時もまだ問題行動にあまり改善がみられなかった。

本児の家族は父母と姉（小6年）と弟（3才）の5人家族である。それに昭和39年1月までお手伝いさんが同居していた。

本児が昭和38年4月に2年保育の幼稚園に入園してから，問題が現われて来たわけである。本児の父親はこどもたちの教育に無関心で，母親に任せっぱなしであった。彼は従業員70名を擁するボイラー製造業者で仕事熱心である。

今年1月まで，家事を手伝ってもらうためお手伝いさんに来てもらっていた。この人は，仕事はしっかりやるし，責任感は強いが，我侭で神経質で強い性格の人であったという。こどもにロやかましく，こどものことを心配して，あまり部屋から外に出そうとしなかった。

母親は自分の身体に自信がなく家事をするには一人では大変であるし，夫と一緒の時間が少なくて，淋しいので，お手伝いさんに身体的にも精神的にも頼っていた。しかし，一方で母親はこどもたちが何かこのお手伝いさんのためにスポイルされているようだと感じてもいた。本児の姉も別の問題で母親の頭痛の種である。プレイセラピィを続けているうちに，弟を残虐な位にいじめるという問題も浮かび上って来た。これは今までは人におびえていた彼が，幼稚園に行くようになり，友達とも喧嘩したりして元気になって来たことと関係があるようであるが，一方父親が，びっこの弟よりも彼の方を可愛がるため弟に対するうしろめたさがあるのではないかとも思われる。

○このスーパーヴィジョンでとりあげている場面

これまで何回か泥棒をつかまえる遊びを続けている。本児（K）は警部，私（T）が泥棒である。

今日もまた三箇ばかりあるオモチャの電話を使ってTに話しかける。「つかまえに行くから待っておれ」そしてTの所に来て手錠をかける。部屋の隅につれて行って，牢屋にいれる。Kは命令口調でしゃべり，Tがいうことも自分で『「いい」といって』と指図する。

このような遊びの途中2才の弟（H）のことにふれ，自分の居ない間で自分の紙を使ってしまったりする。そんな時KはHの髪の毛を引ぱったりおなかの上にのってやるんだという。KはTを信頼した様子で自分から話しだしたのだが，Tはこの機会にKの中のHに対する自分の在り方を反省してもらいたくなって，その話しあいを続けようと思う。そこでBoss. M. の手法を使って，「K君がH君に乱暴しないようにできないのは，どうして？」と語りかける。この言葉をきっかけとして，Tの予期に反して，KはTに当り始める。Tに手錠をきつくかけたり，部屋の角に追いつめたり，ハンド・スクーターにのりながら「先生は嫌いだ，大嫌いだ，出て行け」と叫ぶ。Tはその攻撃を受け入れるので大わらわで，Kの気持を何とかなだめようと努めていた。しかし，一方で，そのような攻撃という形で彼の気持が出されていることをよろこんでもいた。

この回はこのようなわけで，Kの憤慨したままで終ってしまった。

<K．M．ケースについてのスーパーヴィジョン>

（1964年1月29日のスーパーヴィジョン）

記号の説明
- N：　スーパーヴァイザー　N
- T：　スーパーヴァイジー　T
- M君：Tのクライエント
- H君：クライエントの弟
- S：　コメンター　S

N_1 君自身が怖くなっちゃった，その前にこういうことがあった，ってといういうこと。①

T_1 手が汚れていたので洗ってやったのね②そういう時に彼が（M君）お母さんに抱かれてこっちを見ているんだな，[1]お母さんにすがりつくようなちょっとそんな様子をみせてね　そんなような時に僕が彼（M君の前に遊んだ別の子）と遊んで彼の面倒みてたってことがね何かこうちょっとひっかかるものがあったわけ，自分の先生をあの子に（別の子）とられたっていうような，というと少し極端だけど，そんな風な気持感じているんじゃないかなって思ったの（なるほど）もっともあの時はその別の子のお父さんお母さんなんかがいたしごたごたしてそんな雰囲気におされてね　そういう風にお母さんにすがっていたのかもしれないけれども，まあとにかく部屋に入る時の様子っていうのは前にも話したようでしのび込むようなのね　でもついてくる時には全然おずおずしているようなところはなかった。で，遊びの中で電話で「あの子と話したの」とかね，それから別のことも聞くのね。僕の感じとしてはしつっこいとかあるいは嫉妬というかねそんな気持じゃなくって，もっとこう関心あるっていうようなねそういう気持で聞いている位に思っていたんだけどね。そしたら弟とのことが今日出てきた。前もちょっと話し出したことはあるんだけれどそれを今考えてみるとそういう風なことがあったのかなっていうことになるんだけれど

N_2 そういう風なことって？

T_2 他の子供と僕がそうしたっていうこと

N_3 その辺，自分の先生をあの子にとられちゃったっていう感じで彼としては少しショックでね淋しくって——そのことがある意味じゃ君に対する憎しみのような感情になって，何かそのへんのところがわだかまりになっていたのが，さっきいったアグレッションを促進させているんじゃないかなっていうこと。その感じがピンときたわけなんだな。③

T_3 今まで僕の記録の中には残しておかなかったんだけど　あの子ね　椅子がたりなかったとか部屋（プレイルーム）が変っている（前にきた時と）とかいうことに対してかなり敏感なの，何か，自分がいない間にそこの状況が変っているって。

N_4 もう少しいえばこの部屋は自分だけがこの先生と一緒になれる，あとだれもこの部屋に来ない方がいいみたいな感じもあるんだね④

T_4 そいつ　僕　たしかめてない　そういう気持はありながら何か一面で確かめることで　僕　自身躊躇している。そのうちどんどん遊びが移るしね。そういうことでまあ……とにかく前にあったものがないとなると，たとえばピストルなんかでも「三つあったね」「どうしてないの」とかね聞いているんだよ。今Nさんが表現したような気持って確かに彼のなかにある。端緒となって……

N_5 何か君の中で確かめたいと思う形でひっかかっていただけに，その「おじさんが先生だってやっつけちゃうぞ」ってすごんできた時に，ある意味じゃくるべきものが来たっていう感じでもあったわけなのかな（ウーン　Tは首をかしげる）[2]確かに自分を，自分に対して怒っているんだっていう感じはあったわけ。

T_5 今日ね，確かに僕の方から彼に遠慮する気持があった。それは僕の方の感じた弱味かもしれないけれども，つまり彼がそんな風に見ていたんじゃないかなっていう時には，僕はそれを心配していたわけですけれどもね。で，一面では彼が割に元気に遊ぶし，僕に抱かれて安心しているっていうところでこう安心していたわけね。

N_6 少しずつ安心させられていた矢先だったわけだな。

T_6 うんそれが出てきた時にはね。それでこう手錠を作るんだけどね，何かこう，ここはめてっていうの，だからそれを持っていっちゃはめているうちにね，はまらなくなっちゃ

N_7 （Tの言葉を途中でさえぎりおっかぶせるような調子で）あなた　さっき「いやだった」っていってたね。

T_7 いやだとは

N_8 手錠をはめるのは……

T_8 あゝいやだっていうのかね……話はちょっと前後するけどね，そのH君(弟)の話が出てきて時にね，僕はたしかこんな風に云ってみたんだよ。「どうしてね，H君に乱暴するようにしないのってね。そしたら途端にもうよそうっていってね。かなりエモーショナル（emotional）になってね。

N_9 あなたはその問いかけが確かに何らかの契機になったみたいなのかい。その時を境に何かエモーショナルになってきた（そう）ような気がする？

Nの内観 （スーパーヴァイザー）	Tの内観 （スーパーヴァイジー）	Sのコメント （コメンター）
①これまでの話のなかで「僕自身も何だか怖くなってしまってね」というのがあった。この時のTの説明には色々なことが錯綜して出てくるので，それを整理すると同時にTの内面的な感情の動きを確かめたかった。 ②この回のすぐ前にTはインテーク（Intake）として2，5才の男子とプレイ室ですごした。終って待合室でその子の汚れた手を一緒に洗ってやった。それを来て待っていたM君が見ていた。	1この子は母親からの離れ際がいつもぐずぐずした様子を見せるので，Tにとって気になっていたのだが，この日は特別Tの方をうかがっているように思われた。	
③Tが他の子に親しくしているのをM君がおだやかならぬ気持で受取っていたのではないか。というTの負い目が「M君のアグレッション」という認知の仕方に影響しているのではないか。という気持。 N_4 T_3 は「変った事態に対して敏感な子供だ」という程度のことだと今は思われる。私はN_3 の線に沿って少し先走りしてしまったようだ。		N_3 では③でNが云いたがっていることをもっと直截に云えたはずだと思える。Nの中で持ってまわった表現をしているその辺に注目したい。「T君としては，他の子と親しくしているのをMにみられて，何か負担のような気持，負目があるような感じがしていたのかしらね。」
	2来るべきものがきたっていう感じは私にはなかった。そのような予感を持っていなかったからだ。	T_5 「たしかに何か遠慮する気持があった」という点を受けとりたい気がする（N_6）
N_7これはN_1で確めたかったことがなかなかすっきりしないので，あえてもう一度問いかけてみた。「いやだ」というTの情緒的反応（reaction）は私にとってかなり重要なものに思われた。少しこだわりすぎる位に。Tがそのことにはっきり向わないことにいらだってもいた。T_6	N_7 Nがすごく勢込んで向ってきたような感じだった。	N_7 の感じは確かに正しいのだろう。それだけにこの事をとり出すのに慎重であるべきだったのだろう。「さっきあなたが手錠をはめるのはいやだっていう気がしたということ，その辺にあなたのM君に対する気持の一つのあらわれがあるっていう風に私には思えるけど……その辺

T_9 かなりそれを彼としては自然に話していたの。それでその時に「H君に乱暴しないようにしないのはどうしてって」ちょっと大人に接っするような接っし方しちゃたなっていうような気持ね。

N_{10} H君に乱暴しないようにするにはどうしたらよいのかなあ？ということ

T_{10} そうじゃなくて乱暴しないように出来ないのはどうしてってね（なる程）

N_{11} 君がそういう形で彼に問いかけたかったのは，問いかけた時の君の心中はどんなものだったのかしらね。

T_{11} ひとつにはね，僕はBoss，M. なんかに影響されているところがあるんだね。本を読んでのことなんだけれども。それでこういう手法は使ってみたいなあっていう気持はあった。つまり「～しないのはどうしてか」っていう風なね。これは成人の場合ならば僕はいいんじゃないかと思っている。充分検討したわけではないけれどもね。「～するのはどうしてかって」いう問いかけはね，何かその人が今現にしていることに対して聞いて行くことであり，その人がある今のあり方を尋ねることであるから，その人に脅威を与える行き方であり，それからその人の世界を拡げるような形にならない。ところが「～しないのはどうしてか」ということは，他にね，例えば「可愛がってあげないのはどうして」と―<聞きとれない>―いう風にもちょっとしてみたのね。そういう言い方はたしかに僕として，他の世界に拡がるような問いかけの仕方であるし，同時に自分，クライエントならクライエントに自分の過去のあり方を自分でながめるっていう風なあり方を経験させるわけでしょ。だからそういう風な問いかけをやってみたらっていう気持は前から僕にあったわけ。それで，それはむしろ成人についてそう考えていたわけだけども，子どもについてそういう風な出方は出来ないかなっていう風にも考えていたわけ。この場合にはむしろ彼に脅威を与えた，そういう風な理窟じゃないんですね。子どもっていうのは何かこんな出方っていうのはNさんなんかには方法的で，こちらの構えを設定するようで，ちょっと抵抗を感じるのかも知れないけど。

N_{12} 僕はね，その方法，手法それ自体が何か手法を使ったりしてはいけないとは思わないしね，つまり現実にどんなことがあるにせよ，自分がこうしてみたいっていう或る一つの自分の中でのモチベーション（motivation）があるわけでしょ，働きかける対象に向ってのね，そのモチベーションを具体的にうまく生かせるような道具（instrument）が必要なわけでしょ，その道具があれこれと選ばれるわけでね，我々がこの気持を相手に伝えたいっていう時の「言葉」は一つの道具で，それは「言葉を使う」という一つの手法と言ってもかまわないと思うんです。で，僕，今聞いていて，むしろ確かめたいことは，その手法自体の持っている意味はよくわかるわけだ。つまり，相手が現にある今の姿以外の可能性ってものにこちらが着目して，ともにその可能性を一緒に聞いていくように相手に呼びかける，ま，云ってみれば，そういう働きかけであるわけでしょ，問いかけがそういう意味を持っているってことは分るんだけれども，あなたが何故その手法を選んだのか，それを選ばせるあなたのもうひとつ深いモチベーションがあるわけでしょ。あなたがそういう問いかけでもって，もっともうまく生かされるかも知れないと思う，そのもとになるモチベーションがあるからこそ，具体的にそれを使ってみたいと思ったわけでしょ。

T_{12} 僕はね，何かこっちから出ていく，しかも弟のことがでて来たその機会をね，もっと生かせないかなっていう気持。（なるほど，なるほど）この前の時も弟の頭とぶつかって，鼻血をだしたっていう時も，弟の気持っていうことをね，どんな風にとらえているか，ふれていってみたかった。その時はほとんどでてこなかったんだけれども，今日なんかわりとよく話したの，そのことをたとえば髪の毛をすぐひっぱるとか，おなかの上に乗るとか。

N_{13} 何かもう少し彼が弟を可愛いがるような彼であってほしいっていう気持はなかったのかしら，

T_{13} そういう風に動いてもらいたいという気持はあった。

N_{14} 動いてもらうようになる，そういう可能性に対して何か自分が積極的にでて行きたかったわけだね，彼がそうなるのを漠然とたゞ手をこまねいて待つより何か一緒にその可能性を切り開いていきたかった。

T_{14} そうなんですよ，それがどうなのかは，たとえばせっかちに出過ぎたのかね，今の彼のあるがまゝを待っていられない形になっちゃったのか，或いは彼が僕にね，そのいろんな気持，例えば僕が交通事故などにひょっと会って死んだらどうするって，悲しいでしょって云うから僕も悲しいって云ったの，それとかね，後で手錠をゴチャゴチャにしてかけられなくなってしまった，それを僕にはずしてくれ，それでほどくとまた嫌がる，でそれじゃっていう風にやっていると，そのスクーターに乗りながら「先生はきらいだ，大きらいだ「出て行け」

の流れのまゝでは，その辺がまたうやむやになってしまいそうな気がした。

T_8 を聞いていて，私はN_9 のような解釈が生れてきた。その時にはT自身もこう感じているような気がして，それを確かめるつもりだった。やはりこれは私自身の感じ方をTに押しつけているように思う。こういうことはこの後にも随所に出てくる。これは私自身の大きな問題である。

N_{11}　Tの問いかけは，私には乱暴するM君をそのまゝにしておけない何かがある。そこから出ているのではないかと思えた。私の心中ではすでにTをそのようにきめてかかっていた。そういうTだというひとつの先入観（Preconception）が確かにあった。Tがそういう自己の内面を探って欲しいと思ってN_{11}が出てきた。

N_{12}　私はTの問題の仕方が少し不満だった。私がN_{11}で求めていたものにまともに応じてもらえなかったから。つまり，Tが何故そんな風に「問いかけ」たくなったのか，それを「手法」自体が持つ意味よりもっとT自身がクライエントに対して持つている深いレベルでの態度につながる形でTにたしかめてもらいたかった。

しかし，Tがその手法に対して私が反対しそうに感じ，幾分構えているように思ったので，私の気持の伝え方は慎重になってしまった。

N_{13}　この表現は，私がTに対して抱いているかなり強固なイメージを端的に現わしている。T_{13}の反応はだから，私のイメージを裏づけるのに充分のものゝように思えた。そ

T_{11}　Mさん（母親のセラピスト）と話合ってから何か治療効果を**催促**されているように感じた私は，何とか自分のやり方を工夫しなければならないように感じていた。それで自分の新しい試みとしてBoss，M.の云っているようなやり方をとってみたくなっていたわけである。

T_{11}　のように言いながらも，Nが何か不満を感じている様子を感じた。このような技巧を弄したやり方に不満なのかと思った。

N_{12}　の長い説明は，Nの通常の態度をこんなものだろうと別の形で考えていた私にとって，珍しい感じを与えた。

深いモチベーション（Motivation）とは何だろう。今まで云ったことでは不充分かなという感じがしていた。Nが何かを求めているようだが，それが何かということは私には不明だった

もう少し一緒に考えてみたいという気持がするんだけどね」（Nにはそんな風に思えるということを明確にすべきだったろう。）

N_{11}　「乱暴するM君をそのままは見ていられない気持があったのかしら？」この方が卒直だろう。何かがあったかという問いかけはあいまいすぎる。

N_{12}　では卒直に，こういったTの考え方は充分分らない，不満であることを告げるべきであったのだろう。「私の問題にしたい方向とはずれている」ことを告げた後にT_{11}の意味したいことに戻れたらと思う。

N_{13}　ではTへの問いかけというより私（N）としてはこんな風にその時動きたいという気持を伝えた方がいゝと思う。「僕はこんな風にうけとるんだけどね」「君のうけとり方とはちがっちゃうかも知れないけれ

N_{15}　それはやっぱりこうその問いかけが原因になっているみたいだ？何がそう彼にさせたみたい？

T_{15}　とに角その時もね，H君のことがでてきて，僕が何かH君のことにもどろうとすると彼がいやがる。それがやっぱり原因だと思いますね，僕が，

N_{16}　問いかける前は，彼はごく自然に嫌がらないで自分の方からH君のことを話していたわけでしょ。非常にスムーズに彼にとって抵抗なくT君に向えていたわけだな，少なくとも現象的にその問いかけを境にして彼の方はもうそのことにふれたがらなくなってしまった。あなたがそれに固執しようとするとリアクション（reaction）を起してきたわけだね。

T_{16}　幼稚園に行かないとか「こゝに来ないようにしてやろう，そうしたら困るでしょう」

N_{17}　いろいろ嫌味を云うわけだね。どう考えたらよいのかね，せっかちだったのか……，それとも前の手を洗ってやるのを見ていたことが彼の根にあってね，それが爆発したってこともあるかも知れないな。

T_{17}　それはどうもよくわからない。むしろ彼のとらえ方って僕は何か自分のいない間にね，あゝ関係あるかも知れない，そういうもの全体がね，個々のものっていうより，自分のいない間に何か様子が変っていたり，誰か，例えば弟なんか紙をクシャクシャにしてしまったりするとやっつける。H君は弱いでしょ，だからやっつけるんだ。でも何か僕は彼を，例えば，窓をふく時なんか，もっと高くしてとか，足を抱いてってんで抱いてやったりなんかして，こう一生懸命自分のハンカチでふくんですよね，そういうような関係は僕にとってはとても気楽であって，そういう中で何となく出せるようになった彼を感じられるようになった。

こで，N_{14}になったようだ。反省してみると，私はTのありのまゝを理解しようとするよりは何とかして私のイメージに合うようにTが自分をさらけ出して来るのをあせっていたようである。Tは仲々自分の内面に目を向けようとしない，向けさえすればきっと私の推測に行きつく筈だ，私はTの「向き」を内側へと変えさせることにあせって，自分の推測の狭さをたしかめるゆとりがなかった。

ど……etc」Nの遠慮深さはTに対して何かNの裏にあるものを感じさせ，歯切れの悪い，シンプルでない関係を作りだしてしまっているようだ。

$N_{15,16}$で，「私の感じではTの問いかけはたしかにM君にとって或る脅威だったにちがいない」M君のその後のリアクションはそこから出ていると思った。この解釈にはかなり自信があったので，Tもそのように感じてほしいと思った。そのように感じないとしたら，それはTがどこかで defensive になっているからだと思っていた。

$N_{15,16}$での感想を何故そのまゝ言葉で告げないのか？「そういった問いかけをしたらM君に脅威を与えることになるんじゃないかしら，私にはそう思えるんだが」と。

N_{17}，こんなことはないと思いながらもこちらの解釈を先にぶつけても仕方ないと思って妥協していた。

N_{17}で解釈のレベルでなしに，また表面的にTをうけとるのでなしに，Nが直接うけとった（この会話の中で）実感を何故出さなかったのだろう。「本当にそうかしら，僕にはどうもそんな風にうけとれないんだけど」

2. 3. スーパーヴァイジーの立場から

§1. 私がスーパーヴィジョンに望んだことと得たこと。

(1) 初めに私がスーパーヴィジョンに望んだことは私の技術の向上ということであった。このようないい方はある人々には，私が自己中心的に動こうとしていたのではないかという誤解を与えるかも知れない。しかし，そのような誤解（あるいは正解）を冒しても，やはり私の最初の意図は自分の技術の向上ということであったといえよう。自分の技術が高まってこそ，クライエントのためになりうるのだと思っていたのである。

そのような期待に沿って動いてみた時に，私自身どうしてもプレイルームの中で緊張し勝ちであり，動きがぎこちなくなるのであった。また私を緊張させた要因は他にもあった。それは，初めて携帯マイクを身につけて，しかも観察窓（one way mirror）ごしにのぞかれているという意識であった。子供にマイクを気附かれないようにという配慮もあり，自分のやり方を見られているという気持もあった。そのうえ，前任者から受継いだ時のその子についての話からアグレッシイヴ（Aggressive）な子だというイメージ（image）をつくりあげていた。しかも母親といっしょの時そばへ行ったら，母親の後ろへまわってかくれてしまい，全くおじけづいた様子で顔をくしゃくしゃにしているのを見て，何か腫れ物に触るような感じを与えてくれたのでもあった。

そのようなわけで，プレイルームの中での私は子供をまともに見られないような状態であった。私自身自分の興味で動いていた方が彼を圧迫しないし，緊張させないだろうという気持があった。初めて，この相談室のプレイルームでやるというせいもあって，道具の方に注意しているような様子をしながら子供の振舞を意識していた。

この子供とのはじめてのプレイセラピィのあとにうけたスーパーヴィジョンにおいては，私が子供を見ていないということが問題となった。私は，私の目が，あのように緊張している子供を一層緊張させるのではないかと考えていたとのべた。そのことが話し合われ，結局，母親の見ている目と私の見ている目と同じ見ている目ではあっても，それは心理的にも表情の上でも違うものであろうし，それを感じる子供の方にとっても違うものであるはずだということを私自身が納得した。

さらに，前担当者が女性であったことも私の心にひっかかっていた。しかし，それは私自身が，女性は優しいものという世間一般の概念に捉われていたということを自覚した時に自然に解消してしまった。

「まなざし」は人を凝固させるというサルトル流の概念は一面的なものであると思う。むしろ心理療法においては，治療者の「まなざし」は凝固した人の心をとかし，あたゝめ自由にさせるものであるし，そうでなければならぬ。前者は人間関係を断絶させるが，後者は人間関係を発展させるのである。ということを自覚した。そしてその自覚は次の回において確かめられたのであった。

(2) 次に私がスーパーヴィジョンに望んだことは，クライエントの状態をみながら，それに応じて，どのように自分が動いていったらよいのかということを知ることであった。

とにかく相手の動き方をよく見るという心構えは出来たわけである。しかし，相手の動き方に応じてどのように自分が応じてやれば彼にとって最もよい成長をもたらしてやることが出来るか，という問題の解決をスーパーヴィジョンに対して期待したのであった。

プレイ場面において私が困っていたことといえば，子どもが時々私との関係をはなれ，1人でハンド・スクーターに乗って下を向いて乗り廻している時などであった。そのような時，私の感じる事は，彼の出方に対する私の応じ方がまずい為に彼に不安ないし，不満を覚えさせてしまったのではないか，ということであった。自分の出方に対して充分に応じてもらえない不満な気持から孤独になり，下を向いて淋しそうにスクーターを乗りまわしているのかな，という罪責感めいたものを感じてしまうのであった。

そうするとこの場を何とかしたいという気持，自分の方から関係をつけたいという気持から，彼の後からコルク弾つきライフルで，彼を撃ってやったりすることもあった。ライフルの撃ち合いはその前にしていたので，恐怖を与えないと思ったから，そうしたのでもあった。

また，床にオハジキをぶちまけてその上を歩くとそれがつぶれたり，スクーターでのし廻ったりすると，これまたオハジキがつぶれて，私は嫌な感じがしたのであった。自分はオハジキのつぶれるのは嫌だがそれを彼にどう伝えたものかと考え込んでじっと子供をみたまま坐り込んでいたりもした。

このような問題を感じながらスーパーヴァイザーとクライエント中心の方式によるスーパーヴィジョンを展開するわけであるが，その時私が彼から学んだものは，「自分が相手の動きに応じてどう動くかということを考えるよりも，相手のあり方動き方そのものを大切にす

る。」ということであった。それはスーパーヴァイザーのプレイセラピィへの係り方であるわけだが，クライエントが今そうしていることが，彼にとって今一番大切なんだなと思うと，自分が全く自由でいられるのであった。治療者の側からはあくせくとクライエントの方に働きかけてゆく必要はないわけで，気楽にみていられるわけである。私は自分の生活一般に対する構えとしてあくせくと向上しようとする意図はもっているが，一方そのような余裕のなさということを重荷に感じ，反撥しているところもあった。プレイセラピィの中にもそのような態度は反映していた。それで，そのような考え方によって自分が気楽になれるということが嬉しくもあった。

ところで，このような考え方，感じ方は私の中に定着する過程では，スーパーヴァイザーの私に対するせっかちな働きかけから由来する投影（Projection）の力にあずかっていた。それは，スーパーヴァイザーが私の考えていることはこうだろうといったのであるが，私の方はそういわれて，何か自分にないものを彼からあるとみられてしまったような重荷を感じた過程であった。そしてまたそのことを私の方からいうことによって，彼の投影あるいは先走りとわかり，私も気が楽になって，彼の観方を主体的に取り入れることができたという過程であった。

(3) さらに私がスーパーヴィジョンに望んだことはクライエントのありのままを受容れるという慰安，休息の側面と，クライエントの発展向上を望むという努力，苦痛，向上の側面をどのように結合し統一するかということであった。

クライエントはそうしていたいのだろうと自由に見守っているということは実に治療者をのびのびとさせ，それにともなってクライエントものびのびしたようであるが，一方において，重大な問題が持ち上って来たのであった。すでに幼稚園の登園拒否も1回目から問題解消し，自家中毒も軽くなって来ており，安心していた矢先，冬休みの後，1月23日，12回目の時に，前に戻ったようだと母親が発言し，それを聞いて母親の治療者と共に，今までの楽観的な観方を捨てて何とかしなければならぬと考えたのであった。私は，「プレイルームの中でいくら良い関係がつくられているといっても，現実の場面で子供が乱暴している，家では弟をいじめ，幼稚園では友達と喧嘩するというのでは仕方がないではないか。」といわれ，自分でもこれは何とかしなければならぬと考えた。

ところが，次回に私が試みたことは最初のころの技術のレベルに近いことであり，クライエントの攻撃を喰った。子供から「僕は強いんだぞ，出て行け。」といわれ，成程乱暴なんだなと解ったが，そのままでは相談に来なくなる危険もあり，何とかしなければならぬと思った。そのころ私のやるセラピィはどれもクライエントからこわがられるような傾向があった。慰安，休息から抜けて深まろうとするのだが，そうするとかえって，以前のやり方よりまずくなったような感じがするのであった。

この問題に対する私なりの解決はスーパーヴィジョンの中からは得ることが出来なかった。というよりも，スーパーヴィジョンで深く検討する前に問題が解決されたともいえよう。

結局この問題は，ある人のテープを聞く中で解決された。

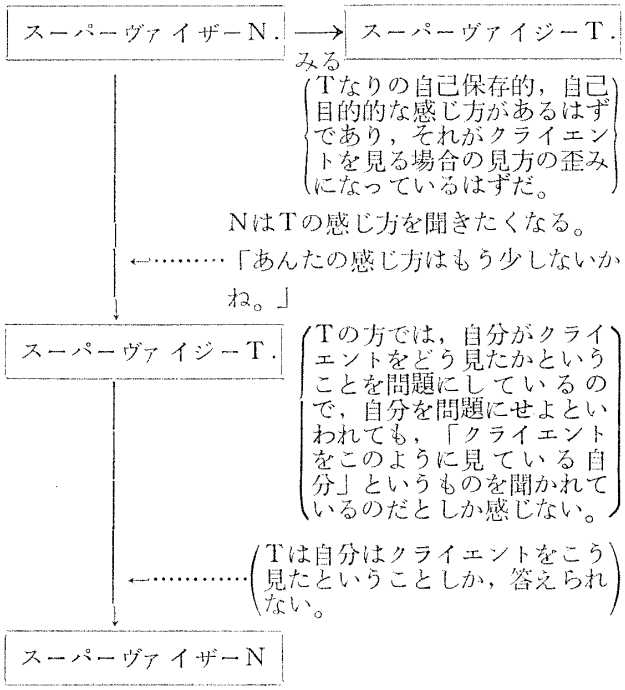
それは要するに，クライエントは，本質的に，動き，成長するものだということである。エネルギーはクライエントの中にあり，いろんな方向に発展してゆく力も彼の中にある。彼を受容れるということは，その動いてゆく彼を受容れることである。こちらから無理に動かそうとあせらなくとも，彼が発展的に動いた時にその動きを阻止せずにむしろ助けるようにしてやれば，無駄な力を費すことなく，彼を動かすことが出来るのである。その発展的な動きを生かし切るには治療者自身が成長していなければならないのである。そこでやはり問題は治療者自身の成長ということに戻ってくるようである。

自分の様々な行動について自分は何故そうしてしまったのかということを深く考えてゆけば，次第に自分が明らかになってくる。自分の中の様々な整理されない意識下のゴタゴタしたもの，それらを一つ一つ取り出して意識の照明にあてて整理し，それをまた意識下に返してやることによって，自分の感じ方や行動の仕方がより一層整理されたものとなってくるのだ。そのようにして，自分の経験がより豊かになるにつれ，それらの全てを充分に生かし切れるようになるにつれて，より一層すぐれたセラピィが出来るようになる。そのように私は今考えている。

§2. スーパーヴァイザーが私に期待しているものと私の感じ方との違い。

スーパーヴァイザーは，私が嫌だとか好きだとかいうような，自分自身のための感じ方を聞いているように思われた。しかし私の方では，彼に「あんたの感じ方はもう少しないかね。」といわれると，自分がクライエントをどう感じたかというクライエント自身についての感じ方を聞かれているように感じてしまうので，そこでズレてしまうようであった。

それを下図で示すとこうなる。



スーパーヴァイザーの方は自分の求めるものに答えてくれない私にいらだち，また自分がそれを私(T)に気づかせられないということに対して，自分自身にいらだつという場面もあった。

私の方は相手が聞いてくるものを一生懸命に答えているつもりなのだが，答えるものが片っ端から相手の気に喰わないものであり，「まだないか。」とないものねだりをして来ており，しかも自分に対していら立っているような相手を感じて，すっかり用心深くなり相手の気に入りそうなものを探しているが見つからない。だから不安を感じて，相手に不満を持つというような場面があった。

スーパーヴァイザーに対する私(T)の感情を解り易くするために極端な形で表現すれば，「俺のいうことに片っ端から不満そうな顔をして，あいつはちっとも俺を受容してくれていないではないか。俺は何をいったらいいのだ。」というようなものである。勿論これは極端な表現であり，実際に感じているものはもっと弱い形，自分に対する腹立ちなども含んだ形となっているのである。

以上の喰い違いを避ける方法としては，スーパーヴァイザーがもっとT，を受け容れてくれることだと思う。例えば彼の方から「あんたはクライエントをどうみるかという自分を問題にしているのだね。僕は君自身の感情，君自身が自分のために感じている気持，つまり自分自身をどう感ずるかということを君に問題にしてもらいたいと思っているのだ。」とはっきりいってくれたらよかったかも知れないと思うのである。

またT，が，自然に話の中で触れている自分の感情をうまく導くような形にしてくれたらよかったのではないかとも考える。

一方的な要求ばかり並べたが，T，の方の責任ももちろん無視できないと思われる。

以上の不満はともかくとして，このような過程を一般的に考察してみると次のようになるだろう。自分を見ている自分も一定の成長段階にあり，より高い段階の自分からみれば未熟なものであるというように限界のある自分が自分をみるわけである。しかもその限界を必然的におびた自分が事態を確かめる際の根拠なのだということである。確実さの規準は自分にとっては自分以外のどこにもない。しかもその自分の認識段階は相対的のものであり，より高い段階からみれば未熟なものでしかありえない。観察者たる自分の条件によって外界の見え方が瞬間瞬間において自分にとって変ってくるのだということ。だからこそ，そのことを知っていることが心理療法においては重要なのだということを改めて知らされたわけである。

2．4．スーパーヴァイザーの考察

このスーパーヴィジョンで問題にしたセラピイでは今までになく新らしい事態が起っていた。

それはクライエントがセラピストに対して，反抗的なつよがり，攻撃的な言動をあらわに生々しくぶっつけてきたのであった。セラピストは，スーパーヴィジョンに入るや，まずそのことを報告してきた。私の関心も大いにそそられ，つぶさにこの辺のことを検討してみたいと意気込んだ。私にとって，何かそれは，より深いクライエントの情緒的世界が，関係のなかに，あらわな現実として息づくようになったこと，治療関係そのものがより深い人間的出会いの相へと展開して来たしるしのように思えて，楽しみであった。

当初，セラピストは，T_1 でのべているようなことが，クライエントの攻撃的表明につながっているのではないかという感じをたしかめていた。他の子どもに親切にしてやっているころを，たまたまこのクライエントに見られてしまった，というセラピストの負い目，そういうことに割と傷つき易い子ども，というセラピストのクライエントイメージなどにおのずからそこでは直面することになったし，私は比較的素直にセラピストとともにあることができた。

ところがT_8 で，「H君に乱暴しないようにしないのはどうしてなの」といった意味の「問いかけ」をしているセラピストにふれてから，私はセラピストからだんだ

ん離れてしまった。以後の私は，この問いかけに関して，セラピストを執拗に追求することで終り，セラピストの方も，どちらかといえば，不毛な時間を過すことになった。

この辺のいきさつを少し詳しくのべてみよう。

私はクライエントの攻撃性を誘発させたのは，まさにこの問いかけではなかったか，ということがピンときた。この問いかけについてのセラピストの意識的意図は（T_{11}に代表される）彼なりの独特な，しかも一応筋の通った論理をもっている。しかし，その陰に彼自身が気づいていない本当の動機が別にある。というのが私の感じだった。弟に乱暴するようなクライエントを拒否するわけではないが，何かそのままにしておけない。乱暴しないようになるための直接的な動きかけをしないでは落着けない，そういった情動的レベルでのある経験がセラピストのなかに動いていたのではなかろうか。それにつき上げられて，あの問いかけが勃発せざるを得なかったのか，そして，そういうセラピストのあり方全体が微妙にクライエントに伝わり，そこでクライエントは今までのように許容的なセラピストとは違う，乱暴に関しては，家の人と同様に自分を許してくれない人を感じてしまったのだろう。そういう拒否された経験への反応（reaction）があのような攻撃性となって爆発したのだろう。以上が，その時の私にピンときた感じのあらましである。私は，ここに，治療関係のヒナ型が出ているような気がした。

つまりセラピストの行動が，その意識的意図とは別の内面的動機に支えられている時，クライエントに与える影響はむしろ後者によって大きく左右される。したがってその行動の形だけをとらえて，その是非を論じたり，あるいはどうしたらよいかを求めたりする無意味さ，そうせざるを得なかったセラピストの内面をより深く掘り下げることで，より自由なセラピストへの成長が期待される。などなど——つまり私の日頃の治療観なりスーパーヴィジョンについての理念にうまくあてはまる範例がここにあったわけである。

さて，私はそんなわけからして，このセラピストを大切に取り上げなかった。ここでセラピストが充分にその内面を確かめることができるならば，それはきっとみのり豊なか経験となり得るだろう。私はここぞとばかり意気込んだ。それは後述するように，このスーパーヴィジョンが私の求める方向に，うまく展開していかない，日頃のもどかしさが背景となっている。私は事態に対する私の主観的解釈を必ずしも絶対的なものとはしていないつもりだった。セラピスト自身のたしかめが，私の解釈とは異るところに至り，しかも私自身がそれに本当に納得できる，そんな可能性を私は，充分に期待していたつもりだった。

しかし，私はだんだんといらだってきたようだった。「セラピスト自身の内面を確かめる」というプロセスに，私はうまく彼を誘導していけなかった。彼に私の求めているところを一生懸明説明することも試みた。

だが，セラピストの話は，私が思っている肝腎のところには触れていないで，あちこち道草を喰っているように思えたし，たとえば，＜あゝいう手法は大人の場合にはよいかもしれないが，子どもの場合にはやっぱり相手を問いつめるような形になってしまうかもしれない。＞というような問題のとり上げ方から，一向に彼は抜けでてこないのだった。

セラピストの話をさえぎってまでも，私は何度か話題をもとにもどそうとしたり，また自分の解釈を時々セラピストに投げかけてみた。それに応じて出てくるかもしれない彼の反応を求めての捨て石として——というよりはむしろ「お前はこうなんだろう，このように感じられないのは」私がまちがっているのではなく，お前の掘り下げがまだ充分でないからだ。」というかたくなな態度であったと思う。

後半になって，母親のセラピストから，いろいろいわれたことが，セラピストにとっては，自分がもっと何かをしなければいけないようにせかされる圧力となっていたことがわかったが，それとても，私には自分の解釈を裏づける材料でしかなかった。「だから，こうではなかったか」という姿勢で結局彼とつき合ってしまった。

以上を反省的レベルで要約するならば，

①T_8 のセラピストの「問いかけ」を問題にすることに，あまりに意気込みすぎ，あせってしまった。

②「問いかけ」に関する私の解釈は，セラピストを理解するための手がかり，きっかけとして関係のなかに生かされるというよりは，そのままセラピストをきめつける枠になった。

③①と②を含めて，私のセラピストへの接近の実際はかたくな（rigid）に相手をきめてかかり，極端にいえば，相手がみづからをそのように見つめるように強いてしまうことになった。「このように見てほしい。」——それに沿わないものはすべてが道草のように感じられる。また「見てほしい。」方向にセラピストの言葉を歪め，脚色して受取る。

④セラピストは当然のことながら，自由な内的探索をほしいままにすることができない。スーパーヴァィザーが何かに不満を感じ，何かに要求しているらし

いがどう出て応じていいかわからない。応じられない不適切感にしばられてますます萎縮してしまう。（セラピストの感想参照）

以上，この回のスーパーヴィジョンは，両者ともにかなり不満足なものに終った。しかし，この回で浮び上っている問題点は，5回のスーパーヴィジョン関係を通してもあてはまることであるようだ。この辺を手かがりにしてスーパーヴィジョンの全体的な考察を，スーパーヴァィザーの立場から，以下に試みてみたい。

私は，このセラピストとはふだんからもかなり親しくつき合っていた。ふだんの関係を通して，私が感じていた，このセラピストの人間的イメージや実際のセラピイを観察しながら形成されてきた印象からして，子どもに対してポジディヴに働くと思われる資質をこのセラピストが自然にそなえていることを感じていた。一応安定したパーソナリティをもち，てらいのない，卒直な態度，子どもをあどけなく好きになれる豊かさ，自分というものをしっかりもっていて，他人から振りまわされたりすることの少ない強さ，いわば，まだ未開発ではあるが，セラピストとしての豊かな土壌を感じさせられていた。これは，私が，彼のスーパーヴァィザーとなることに個人的な喜びをすら，ある程度感じていることにつながる。このスーパーヴィジョンが，もし何らかの意義をセラピストに与えたとするならば，それはこのような純粋な熱意に支えられるところが大きいと思われる。

私はセラピストが，プレイセラピィを初めてやるにあたって，個々の具体場面でどうすればよいか，ということについて，理論的，経験的な枠組が乏しく且つ，あいまいであることを知っていたし，セラピスト自身もそのたよりなさを充していくことをスーパーヴイジョンに期待していると感じていた。事実，そのセラピイの場面を観察していて，私なりにもっとこうすれば，ああすれば，と歯がゆくなる点もかなりあった。だが，私はスーパーヴァィザーとして，これらの点で直接に何かを補ったり助言することにあまり焦点をおかなかった。

これは私の「スーパーヴィジョン観」にもとづくものであったが，それを支えるものとして，前述のような，セラピストの人間性への信頼が大きかった。セラピストが技術的に迷い，また，実際の動き方に私がものたりなさを感じることはあっても，治療関係そのものは，大きなところで支えられているし，それなりの発展をたしかにマークすることができるという安心の上に，私は安心して，自分の眼目に向える状況であった。まさに，このセラピストの内面を豊かに耕すことで，このセラピストは治療のプロセスをより望ましいものに展開させていけるだろう，と思えた。

しかし，この期待が，ほんとうに拡がりのあるものでなく，すぐに充たされないことのあせりを，しっかりと処理していく誠実さに欠けていたことが第1に反省させられる点である。

実際のスーパーヴィジョンが，治療者の体験を充分に深めていく方向になかなかなりきれないで，私はかなりあせった。そういう方向での自己訓練になれていないセラピストとしては無理もないことだと思いながら，私はそれを真に受け入れることができなかった。このスーパーヴィジョンが，本紀要にまとめる材料になる，という背景が私のあせりを促進させていたことも事実である。

だが，根本的な問題は，私があせったことではなく，そのあせりを私が中途半端にしまい込み，しかも現実のプロセスを何とか求める方向に誘導しようとする不透明なかかわり方にあったように思われる。この不透明さがいかにセラピストにとって障害となったか，T，S，の感想のなかにも大きく指摘されているところである。またそのあり様は，転記の例のなかに如実に現われている通りである。

私は自分の求めを，不充分ながら伝えようとしたことは何度かあった。が，自分のあせりを卒直に表明することのうちに，2人の間のずれの打開を求めようとはしなかった。これは，ひとつにはスーパーヴァイザーたると治療者たる時を問わず，私の人間的な弱さに帰せられる問題である。また，ひとつには，セラピストをやはりどこか一段下にみていて，私自身がひとりの人間として彼に真向うとするよりは，何とかうまく彼をリードして，かくありたい方向に整えてやる，といった姿勢をぬぐいきれなかったことにも帰せられる。

以上のようなことが，われわれのスーパーヴイジョンにおいて，特にスーパーヴァイザーの側の問題としての核心であったと思われる。具体例における反省的考察①②③はいづれも，その根源をここに発してでてくる現れであるように思われる。

スーパーヴィジョンのテープを聞き直してみると，具体例の反省的考察③に代表されるような，スーパーヴァイザーの狭さにいたるところでぶつかる。結局私は，セラピストに，みづからの内面に向ってほしい，と求めながら，その実は，私なりにきめてかかった向い方をかたくな（rigid）に要求し，それに合わないすべてを最初から捨ててかかっていた。もっと素直にセラピストに耳をかたむけていたならば，（あとでテープを聞きなおすというような時）本来私がもとめていたものが，ずっと豊かに拡がっているのを感じ得た筈だ。このような選択

的な聞き方（Selective Listening）が，どんなにかセラピストの内的過程を窮屈に縛りつけていたか。いわば私は自分で自分のあせりの種をまいていたともいえる。ひとつのおどろくべき事柄は，このような私の反省が，この小論をまとめる時に至って，始めて浮び上ってきたことである。これは全くの怠慢というより仕方がない。

スーパーヴァイザーが単なる技術の切り売りや，アドヴァイスに終るのでなく，治療者の人間的成長に参与する存在であろうとするならば，スーパーヴァイザーにも，スーパーヴァィジーと同様に自分をみつめることが必要だと思われる。

結論的に

①私自身のオリエンテシーションに関しては，今回の検討によって，特に修正しなければならない点をみとめられなかった。

②問題は現実のあり様が，私自身のオリエンテーションとはむしろ逆の結果にさえなってしまったことであり，そのことの根本的原因は私の透明さ（genuineness）の欠如という形でとらえられる。

③②の問題は私自身の人間的限界であるが，どこか本気さが足りなかったことにもなる。何とか話し合う機会がありさえすれば，おのずからスーパーヴィジョンになるという安易な自信があったことを認めざるを得ない。つまりスーパーヴィジョンといえども，治療の場合と同じくスーパーヴァイザーの真剣な自己成長が必要である。

④スーパーヴィジョンはスーパーヴァイザーがスーパーヴァイジーのために奉仕するのではなく，本来，治療のあり方についての真剣な語り合いであるべきで，スーパーヴァイザー自身も示唆と向上をともにかちとろうとする意欲と喜びがその基盤にあるべきだと思う。③の反省にもかかわらず，今回のスーパーヴィジョンにある成果がもたらされたとするならば，それは，私のなかに，セラピスト（スーパーヴァイジー）との関係を自然に喜べる何かがあったことに帰せられると思う。

2．5．スーパーヴァイザー—スーパーヴァイジー関係について

スーパーヴァイジーは，この関係に対して肯定的な面を強くかんじていながら，その一面で，スーパーヴアイザーのあり方に注文をつけたい，あるいはこうあってくれたら，よりよかったのにという気持をももっていることを感じているままにのべていた。これは両君のスーパーヴィジョンの話し合いの場面に私が直接参加して知ったことというより，２人の関係について，あとで両君が話しあっている（客観的に自分達の関係について，考えあっている。）場面からえたＳの感想なのである。

スーパーヴァイジーはスーパーヴァイザーとの個々のインターラクション（interaction）を通じて，最も強く次のようなことを感じとったと思われる。

実際のプレイセラピイの場面での子どもとの交渉の現実の経験をスーパーヴァイザーは最も重視しており，これがスーパーヴィザーが，セラピイにあたってきた実際の経験にもとずいて，体験的にとらえられてきた治療観というものにつながっていることをスーパーヴァイジーは感じさせられている。このことについての感銘は，スーパーヴァイジーがスーパーヴァイザーとの交渉を通して，自分がそれまでもっていた子どもに対する接し方を根本的に変える方向に動きだす原動力になっていると思われる。

Ｔ（スーパーヴァイジー）は治療を初めるに当った当初，「セラピイの場面の中で，自分はどうしたらいいのか？」という構えでいた。子供のうごきに応じて，Ｔがどうでていったらいいのかを考えてあせったり，なかなか思うようにできないと考えて，どうしたらいいのか分らなくなる。……よくそういった気持でいた。

Ｎ（スーパーヴァイザー）の〝治療場面での現実の経験を重視する〟気持を，Ｔがうけとったとき，Ｔとしては〝子供が今Ｔと共にいるプレイの場面で，このような動き方をするのは子供自身にとってどのような意味があるのか〟という問いかけを自らにするように動いてきている。子どもと離れた観察者としてのＴが，そのような外からの見方で子どもに接するのではなく，子どもの動き自体を診断するのでもなく，その子ども自身にとって，現実のプレイルームの中での動きが意味があるのだと感じるようになっている。これはＮのスーパーヴァイザーとしての接し方からＴが直接的に学んだことのように思われる。

今までのＴは，子どもの行動や働らきかけから，離れた所で，子どもをみていたり，あるいはＴと子どもとの関係を第三者的にみていたという風に自分の以前を反省している。

今はそのような以前の見方にこだわらずにいられる時もかんじられている。そんなのはどうでもいいんだ。もっとその子が今，私の前でやっていることに重点をおき，その子が今やっていることの意味をその子の内側から，とらえてみようという風に考えつつある。

以上の肯定的な面と同時にＴの中でこのスーパーヴァ

イズ関係（Supervisory relationship）を通じていつも問題になっていた疑問にもふれなければならない。この疑問，あるいは治療者としての自己のあり方についての解決されない問題点というのは，次のようなことであると私はうけとっている。

教育的，指導的であろうとしていたTの過去のプレイ場面のうごきが，Tの中でどのように解消されているのか。どのような形で現在の（上述の）治療的な態度とつながっているのか，ということになると，Tにとってまだまだ不明確である。この事がスーパーヴァイザーのTに対する接近の仕方への疑問ともつながっているように思われる。

「前の自分と今の自分とが区別されて，はっきりちがうものとしてあるというのでもない，しかし，同じ自分だとはいえない。」Tはこの治療的態度のもち方に関する自分の意識をこのように表明している。「教育的，指導的な接近の仕方が，子どもの成長に妨害になることも分る。その意味で以前のように離れれて子どもをみる態度が問題だといわれると，それも理解できる。しかし，……」

Tは，この子をもっとよくしてやりたいという自分の意識と，そのような意識をもつことが，この子をよくすることに妨害になるという理解との視点を経験しつつあるかにみえる‘そして教育的，指導的，治療し，直してあげたい切なTの動きが，どのような点で妨害になるのがを自ら考えようとしているように思われる。スーパーヴアイザーとの話し合いで，Tは根本的にこの2つの肯定及び疑問の点を時に応じてぶっつけてみたい，Nに問いただしてみたいという気持をもっていたようだ。しかし，それが充分でなかったと今のTには思えている。そして，その不充分な動きしかできなかったN—Tの関係内の問題を次のように意識しているかに思われる。

それはTの次のような発言の中に見出される所の“自分はNから，ある期待をもってみられていて，その期待にそうような考え方，態度，発言の仕方をしなくてはならないのではないか”という気持である。

「Nが私に“その時何を感じていたのか（子どもがある行動をしたときに）”と問われた時，僕はたしかに僕なりに感じているものしかだせない。そのことは明瞭だと思えるのだが，Nは僕が感じているもの以外のものを期待しているようなかんじが僕にはする。それは，Nが自分の中ではある答や要求を明確にもっていて，私はこうなんだと思っているのに，表面にはそれをださないで，あたかもTの感じ方を理解してうけ入れているかのような態度をとっている。そんなように僕には思える。……それで僕は本当の自分の気持とずれて……Nのほしがっている答をどこかでさがそうとする方向にうごいてしまうらしい。」

Tの気持では，このNの不透明さとでも名づけられるものは，似て非なるクライエント中心のやり方である。Tの感じ方を本当には尊重していない話しあいの場面だということになる。

このインターラクションは，Tがある感じ方をのべた時，NはTの中にあたかもその気持があるかの如く，Nの感じ方を「Tがそのようにかんじているんでしょうね。」という形で応答してくるという形をとるらしい。（らしいというのは，私は，その具体的なインターラクションを元の形で知っていないからで，NとTとのスーパーヴィジョンの問題の話しあいを通じて推測するに止まるからである。）

このTの感想に対して，Nは「自分の求めているものがTの中に何かあるはずだと思い，相手の感じ方が自分の望む方向にうごくはずだと思いながらTに対していた」と反省している。そのような「望ましい態度とNがTと共につくる」というよりは「Tの中にあるはずで，でてくるはずだ」と思っていたという意識のようであったとNは反省している。それが結局はTの意識の中で，Tが言っていることTがもちだしている問題をNはN流に脚色してTに投げかけているというような感じになっていたらしい。

このようなNの態度は，Tにとって，なごやかでTのことを配慮してくれているという意識でもあるのだが……，そこにNの作為があるとさえ思わせるのである。そして今のような感じ方でいてはいけないということをおだやかにやんわりと指摘されているかんじで，何かすっきりしないという意識につながっていたようである。

Nの方がこのような態度をTにとった理由は，Nの意識の中で少し誇張していえばTへの不信……Tは　些事，つまらぬ事，中心的でない事，（前述のどういう反応，技術で子供に対したらいいのかと考える方向）に注目していってしまうのではないかという恐れ，……につながっていたらしい。そして，Tの内部にあるものをひきだす上でNのあり方がいいという気持だったという。

以上の事をかんじて，私としてスーパーヴィジョンのあり方について，次のいくつかのことを考えさせられた。

1　スーパーヴィジョン関係におけると同様にスーパーヴァイザーの透明さ，（Genuineness）というものが必要なのだということ。少しでもスーパーヴァイジー

にこのようにあってほしいと思っているのに，あたかも自分はそんな風には思っていないかのようにふるまうことは，スーパーヴァイジーに，ある種の遠慮，自分のその際の感情をひっこめてしま動ごきにつながるらしいということ。

2　このような不透明さで接するぐらいなら，スーパーヴアイザーとして感じていることを，スーパーヴァイザーの意見として，おしつけにならない形で，"自分の感じ方であるという前提をつけて" 呈示すべきではないかということ。

3　もしそういうスーパーヴァイザーの自己表現（Self expression）をしないとしたら，どこまでもスーパーヴァイジーを中心にして，スーパーヴァイジーの内面に入る形で一貫すべきであろうということ。

4　以上のような問題があるにしても，TがNによって，セラピイの最も基本的なことを感じだすように影響をうけているということは否定できない。

以上にあげた1．2．3．の問題はやはりAlles oder nichtsの次元でとりあげられることでなく，恐らく2，及び3，の混合した形でNの誠実さ（セラピイの場面でのNの経験及びTとのスーパーヴィジョン関係の中での経験）がTをうごかしたのであろうと思えるのである。

付　記

教育相談室について簡単に紹介する。相談室は，教育心理学研究会（会長，依田新）の中の「教育相談部」に位置づけられている。設立は，32年・現在までに7年の歴史がある。

主な活動は，1)，相談活動（月，木，土曜日9.00～6.00）。親子ケース（子供のプレイセラピートと並行して母親の面接を行う）と個人ケース（神経症その他の成人のケース）とがあり，継続を前提として，現在，週に約20ケースを扱っている。2），カンファレンス（月，木6.00～9.00）—ケースの検討や処置の他，治療者としての成長のためのスーパーヴィジョンの場である，3），トレーニングコース—スタッフのトレーニングとしてテープを聴いての討論や読書会。相談室以外の人達への紹介など。その他に，学部学生の一般実験やゼミに参加している。

このように，相談室は，単にケースを扱うサーヴィス機関にとどまらず，トレーニングやリサーチなど多方面にわたってその機能を果そうとしている。（尚，相談室についての詳しい紹介として，「相談室紀要」を近く刊行する予定である。）

相談室の構成人員は，現在，以下の通りである。

○室　長

沢　田　慶　輔　教授

○顧　問

依　田　　新　教授

三　木　安　正　教授

肥田野　　直　助教授

波多野　誼余夫　助手

芝　　裕　順　助手

○アドヴァイザー

佐治　守夫　国立精神衛生研究所

玉井　収介　　〃

村頼　孝雄　国立国府台病院

古沢　頼雄　東京大学学生相談所

山本　和郎　国立精神衛生研究所

野村　東助　神奈川県立せりがや園

越智浩二郎　東京大学学生相談所

○スタッフ

筒井　健雄　博士課程　3年

渡部　　淳　〃　　2年

大村　彰道　修士課程　2年

春日　　喬　〃　　〃

光岡　征夫　〃　　1年

中井　玆朗　〃　　〃

福田　啓子　〃　　〃